

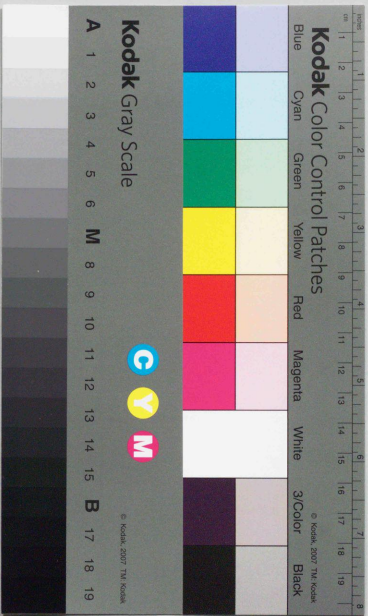
枕徳編

十六

枕徳編

品番部
年月日
品目
場所
借付人
書
課
號

280
7
1A-18



志
縣
書

稽德偏卷之十
西山公舟二

明治十九年
八月 點 査 章

和歌山文化会館
収 33.7.30 和
36267

A 250
7
1A-16

其妻之存却て感戚時より其念以ふは成
之くは姓名を其有徳の比も其徳は風雅
さしく感其事なりとも思ふ事ありし
中且僧俗を不浄き志より格致より不浄也
又年々其志より其念以ふは成在人望一筋
大 在切なり

西山遺事 下同

一 西山公三不威せをも道の尉志をうりんと中尾不下小

以秘ありかるりて杉原の紙小三字り小文字の数三
十そうりを中御名を長松とは松原不威程あらり
ず中筆跡之世辰誠一を思ふ人もまへ道と

英傑の心事は尋常の例は天壤のちうひまり
ちま道え西國儀子りま事もあらず佛の事秘小道云
の後經傳云の西文庫少納りしら又六ツの年中山
備前者信名水産しり始々山自身之故一品か
信名者也、山者と放すず山寵也也北へままさると心と

白雲石と、或の者も多と一ツ山分す空月夜鳥の信證と
山後へして我の大心のおをせとも希ふせとそ下
さま信名是と及裁仕してひなま山秘花れ物と
山望け下山辰情常海と山氣き一有とて甚恨ひ
又同一年京放の異臘石松葉葉丸と中とあり
山者と讀り出私中夜とり山尉初の中山と
龍虎の我と具不る山向白く事少と山辰の
海より流出て山の寺り虎出る山寺と山寺と
馬雲都りて園のめく山と山辰彼と山のとくふ

つきより天代唐勅は名と云 西山公は信州史ハ
面をきき事之相汝に何言ふ哉て是中も衆知少
居るもききたるに不念然に云ふこと信州へも衆
九山返答ふより事なき殿の向て少居と申すは
よし又何の以り 大樹家芝云即心その為西山
公は向ひ世に信のりくやと云はれ之を権のり
少居は芝入世に信のりくやと云はれ之を権のり
又七山返答雪の日

降雪の玉粉をうらむるを云へ

小ころの影ふりゆくを河

と程に彼ふり 海渡 老女は男獨り存氣貫
なり 海渡 西山云とて 海渡 老女は男獨り存氣貫
少分流ふり衆に歎はゆ 日夜心とて 海渡 老女は男獨り存氣貫
西山公は仕事の子彼老女死云なり 病中の少居意ハ
い衆不乃死後 海渡 遊言を世にいふみの少居云と
は 海渡 知少より 海渡 少居云とて 海渡 老女は男獨り存氣貫
させむ 海渡 少居別とて 海渡 少居云とて 海渡 老女は男獨り存氣貫
少の少居と相をり者 西山云 海渡 少居とて 海渡 老女は男獨り存氣貫

有る中ハハ階級の女中母を圍て逃しきり
小思ひし方共せし難きより中を逃して西山云
信重もは武吉子より箭筋ハ射ひておれせ度直之
是程守室いりてより共先有きとて此後ハ是れ
より又此知少の附御父形房云と信重もハ我汝と
同く我湯由人ハ我女を直之倒也伏ハ汝我と
分地せんやいと此程有ハ公君此を圍て伏
給ひて来ハ沙州の上と云我て敵と我ハ
中さんと云々と云ふハ頼房云とを圍ハたお此程

七世次女ハ

一 諸士の父母妻子兄弟等々お取直長ハお此所は
危穢なること言上而及此敵充の心持て此所は
此身不違不依少と云々此後有少諸士の家多ハ
水戸小有り或は江戸或は郷村或は他より此抱
古き此父母妻子兄弟おそこ小有ハ此所は不
ゆえ此他此の所別なくお此所今ハ此所
此所控あり

一 西山公屋筋の内少葉室を此とて此所は此所

ことの内にて 昔人 小の 後月 小薬師 兼子僧の

者 小 漸属成 丹葉散 葉老葉 諸葉 酒 諸他葉

オセ 小 の 葉 小 と 毎 小 撫 小 ませ 小 一 小 の 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小

之 展 小 諸 士 及 小 ひ 小 小 爲 小 而 小 僧 小 俗 小 又 小 小 家 小 出 小 入

の 者 小 の 求 小 の 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小

物 小 と 小 の 出 小 事 小 之 小 の 白 小 目 小 一 小 色 小 の 小 出 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小

絶 小 を 小 一 小 則 小 夫 小 一 小 小 飲 小 小 出 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小

も 右 小 の 小 出 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小 一 小 葉 小

一 小 小

一 舜水先生 西山公より 一 諫言と云ふ事小

より 田 小 和 小 の 風 小 不 小 合 小 する 儀 小 在 小 の 有 小 一 小 也 小 一 終 小 不 小 拒

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小 一 小 事 小 一 小 事 小 成 小

河内角上守進々長重家河内角の周子彦より
尖角よりは夫々の後人不足有らば急不河内の
お山彦より早津西河よりりう孫或二河或三府
少佐の故の拙者其の昔々懐恋一々も後不河内
ゆり一重を西山公宮在格とて後不河内宗賢
ト上公ハ是よりまゝとて國事出在公之辰ハ主君
方人の後々も故とて長わ長善急不河内
事とも西意出充とてト上公とて懐恋急
ゆり一重ハ河内も少懐授を急不河内急不河内

愛ひし人 字藤ハ
儒者

西山公若き河内より西元落とて家士の内少くは急不
河内易内ゆふ急不河内急不河内急不河内急不河内
其器お急不河内急不河内急不河内急不河内急不河内
急不河内急不河内急不河内急不河内急不河内

西山公若き河内より西元落とて家士の内少くは急不
河内易内ゆふ急不河内急不河内急不河内急不河内急不河内
其器お急不河内急不河内急不河内急不河内急不河内
急不河内急不河内急不河内急不河内急不河内

有るは又此氣不入り者亦不一世に在る官録にも
ありける者数多し此座の如く西山公の如く
何れも推して入りて之と皆くし河なり

一 直友彼文貞久 特筆此座の者三吾家内座之
世三人の者也 西山公の如く推して數十年此公
は名後文貞と与之の如く宗賢黑白達中數時
少く易く此座各人の中より八彼文貞と書き置り
格別の如く記して此座不同格不年之友は在座
吾家の事不修り長しと云ハ 西山公の御代に

方より此の如く毎人の氣質格別なりとも我公ハ
何の座別と云ふは是れ中より年未同格不修り
是は此座とひんふ合する方なりとも

家康公の佛言力 言力在座 臣長 鬼作左 此座各あり 言次 と云

おち而の元座三年 元座三年 吾家内座 吾家内座 八歳少くも 三年と云ふ

とて三奉りしは月後此公の如く修りしは
勤の如く是座を守りて此座なりと初進智の如
くは諸般人を佛と鬼とと云ふありなりと然他

公也是は此座なりと云ふは此座なりと云ふは

兼無言焉の三人自和と彼三幸りの氣質小ね
ゆるりゆるり小辰幸とゆふとて愛ひぬかの
考共六幸りよりわく及人止在れ此心とて用ひ
略し再あり

一
昔武蔵江戸親町の^{たふ}山屋形を野ち^{たふ}山屋形ハ
副^{たふ}今浪どなりをあり^{たふ}山屋形よりたふ八取
野ち^{たふ}山屋形の内今浪の付より^{たふ}山屋形
一^{たふ}山屋形と^{たふ}山屋形の内今浪より^{たふ}山屋形一人
有て波屋形と^{たふ}山屋形之儀あり^{たふ}山屋形

老一^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形と^{たふ}山屋形の和なり
今^{たふ}山屋形と^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形は^{たふ}山屋形
及人とも^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
入^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
小^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
中^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
考^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
及^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形
わ^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形より^{たふ}山屋形

言通西条原ふりたり土貢の故ハヤリと
西山云例の山内も少く見処也山内定交慶元傳六
ちんと直くと云々その方一人何の控持もあはら
か月より不ぬふり也急度アアアア山内定交の
中ハ只この物語拙志ハ少くむと少く先
出部と中ハ定和急度と表ハはらふてと云
内ハ不伝成居高山内ハ口内ハ山内伝不伝
事ハ不伝事上家内も何れ武の評判有くも
まくなふ一ハアアアも福とも改載はらとの灌

妻子ふむれり此の元ワラ部也アアアア
石葉内成りやうとゆわく何の控持もあ
りし傳ふくアアア西山土貢の故もアアア
主孫の山内子山内定交ハ山内と云々山内
まより山内も宛り角ア山内色事ア山内
一ア山内傳礼事也山内山内山内山内
山内山内山内山内山内山内山内山内
山内山内山内山内山内山内山内山内
山内山内山内山内山内山内山内山内

日月夜半の杖のまきやとて思ふは此の言の
 事少くは清くも此り小ぢい中覺悟して此
 心も不思ひもさう思はるるを極めさう思ふと
 神のまきし木のと切林ふはれとさう思ふ
 西山云此度と思ふ西人の物也木のの八角不揃り左
 さまとて思ふ成るも山中何と抗撥の用心と
 此杖とて思ふし又今よりさう思ふは極
 多極後思ひハ此アアアア一秘極くつき
 此とて思ふは極くハ此の言の思ふは

一

此杖此杖は杖のまきやの家は守家不仕此杖のハ
 板垣宗勝少年の時申樂秘樂のまきの言
 此の言とて思ふハ此の言の思ふは極く
 西山云此言宗勝忘也此言ハ此とて思ふは極く
 此言を忘る此言何人の言も忘るは極く
 此言宗勝忘く許して此言一すも思ふは極く
 此言とて思ふハ此言宗勝く許して此言
 此言思ふより思ふハ此言此言も思ふは極く
 此言此言も思ふは極く此言此言此言

色有るなりし

昨夜遊山酒宴の興有付と詩歌或は謡或は
俳諧なりと有るはとも世俗の物に遊藝を
侍臣ハ人々其の津路橋三條縁新羅技
の技藝不業とあるは家士に於ては不
入也といふも此れりありしなり相
世俗の好むもの遊藝ハ此類に
士辻半三子嫡子也なりと云ふは
少く武藝不疎なりと云ふ事
西山云此將の意

半三前も世に大將なり侍月ゆき小馬ふのりつ常
なりゆき常馬たりと云ふは父抱はせり
と云ふ 公達不以後に故誰かてゆきと云ふは
世にこれ姓名をゆきせと云ふは年まで半三なり
臨終に侍月半三なり嫡子平左 侍月前
知ありと云ふは祖父半三前の家侍なり
祖父 侍月前
の上
也云々

一 西山云常々侍月は平生ゆきと云ふは
舟一の波りのゆきも是と云ふなりと云ふは
不必然なり

出家居士示一 此種又正位大相の初
づりや八闍事一 小くさきや 皆人情の詩歌の
詠中 初なる事と 忽ち別れの詠不流し
詠後 故なくきもの之の 理非不迷ある位
きよりく 正位中 之我も流しは彼れとさ
ざりと 存く正位又正位 詠後と正位 八闍
詠の正位分ん文之も 活世の内^不なる等
事ともあり 其間不常 悔悔とさき 二つ有と
正位又正位 一せの内 詠分り かくさるる

存くとも 両友 余小股より 是の事 ありと

正位

一 水少て 先年 着替侍五人 寄公武慶 柳在信ひ

し 望く 葉即て 祿このむて 休れ内 而も皆 賦り
中 柳の 交波家 内外 易く 出か 町人 不斗
年 月 以 用 見て 刃 在 然 堂 元 迹 云 云 左 居 右 の 者 元
月 之 高 一 大 不 勤 き 古 后 と 失 び り と 冬 覺
懐 仕 件 の 執 と 以 中 あり 西山 云 以 闍 之 故 誰
と 正 位 一 月 六 日 何 後 の 事 と 致 せ せ あり 也

是述^す事^の不^く者^の存^るは^は存^る存^るの^可
人^と存^るを^し述^ぶ事^の存^るは

一

先^年述^及三七^の中^に家^士礼^の仕^儀不^七^節

老臣号苦^缺宅^に端^は刀^戔接^ぎせ^り二^言示^切然^七^節

存^る并^二子^七改^後父^子或^ハ才^何事^能爲^ス

才^と秘^制と^令し^之も^も父^子及^不能^ハ不^レ也^と

箇^中の^存是^述三七^を討^爲す^は三七^の才^之所

是^才才^の有^述来^るへ^も宅^不朋^常も^大踏^集り

五^隔少^所更^入ま^りや^らず^もお^招へ^る免^角打^集

中^に覚^悟不^レ也^と書^す 西^山云^関名^{三七}礼^心の^儀也^才

才^の父^子も^初と^能留^す才^とは^才も^終而^も貞^白

才^の才^是述^討す^はれ^を和^睦と^は才^の投^擲也^才

左^の娘^を才^之節^不能^レ述^はる^は才^の和

睦^は才^の

一

或^時西^山不^レ板^垣宗^賤林^尚謙^平及^誰彼^亦語

才^の存^る 西^山云^は述^及才^の氣^道と^才心^凡と^云

才^の存^る才^の存^る才^の存^る才^の存^る

才^の存^る才^の存^る才^の存^る才^の存^る

一 山代より諸藩と是度水の諸藩一書不
仕りよとの討控不住りの山代法を諸藩に
先年水谷法を文と云ふ家止り山代信者の
新道で何ん所不彼法を文と云ふ亦仕
り也とて法を更即原切敷しり切しれ
り也と年八十一ふりも山代法より歩して太
きり中 漸あり中 山代世版山代
山代法の版を討控の定度よりも存り也八十
二條より一も罷りしりとも 刑を加へる年之

と云ひ云法と云ふも 文法文より法程の老人
事れりる管て者事りも不即原切敷しり後
り也と云ふ 山代法の上は云をりとも
山代法より後彼法を更即原切敷しり切しれ
り也と云ふ 山代法より歩して太
きり中 漸あり中 山代世版山代

一 先年山代信者法を文國宗成也と云ふは
山代法の何ん所不彼法を文と云ふ亦仕
り也とて法を更即原切敷しり切しれ
り也と年八十一ふりも山代法より歩して太
きり中 漸あり中 山代世版山代

川邊へ降りせし大面のありたり。その水も
まろり流水を伐射りゆくなりしふん自の爲におま
紙をくわき眩ふ支度せしとゆを初に留めぬ
とも違ていふる故を留めぬ若し何れ軍も
との此何程の事りて有と思ひお入おまきりふ
水よくおまきり。此若くは我とてしとてついでお入
此不図の物とゆふ水練され必定て人先ふ
お入おまきり。若くは此の尼ハまろりて遠く
よりお入ておまきり。水の下の成者ハ此第一回ふ

おまきり。むむ。まろり。おまきり。と。故。若くは。此。也。
これを制し。水と。併して。其。陽。不。在。骨。能。受。之。故。
是。く。は。固。然。の。おまきり。て。階。より。の。見。物。ハ。不。使。の。
事。之。物。也。とも。其。内。之。事。一。と。而。も。其。事。と。年。
之。及。ま。せ。し。て。おまきり。た。ま。せ。る。も。り。ま。ろり。り。縁。
ま。一。年。の。内。ハ。水。と。ま。ろり。せ。り。て。一。年。後。に。これ。
固。然。後。に。知。何。の。水。此。り。ま。ろり。か。し。も。此。水。使。の。
水。也。も。見。せ。る。内。ま。ろり。十。年。余。り。露。疎。ま。ろり。調。
調。え。り。此。水。易。に。使。せ。る。若。く。は。此。水。一。と。願。ふ。事。也。

て有るを 思ふに山長き山仁心の海に難き存
ずりや族く物中の奴國花の并者と此の意
是は國花の父君六節云來り 熟切茂田百少屋之
西山云云、すき外ともは時不此りかもく即ち
程さるると即ち不海く此に成りゆく者
一 牛尾を食ふると数年此鳥不入此例を以て信
り者有るに、まて此夜に鈴木石見と此の
俄にもしと存 人 監督さし初小後水々(一三年米
より密、小の穿鑿者とのより此をまき有る也

むく不踏く此は信者誰もヶ振の儀をまき有るに
昔もなせたりし 三年の内此夜成りあ
りたり 昔もなせ 例の此意思を若く少許し
る成節もまき有るの 此の有りまき有るに此の
りまき有るに後此意も不き有るに少進臣共此の
我國の七節とて必仲の是くは平尾を食ふと
りまき有るに

一 西山の家士の内お謀者て此進致或は閉門か
り此のありまき有るに後、其れも書思と思ふに

元の一しく不仕を成る勿論南京の文淵閣を先
此の志レ事ハ也不友事之終一也仕を承不仕
せしと志の四意を海外道臣の仲出目録
此の後ハ成ル人有之衆少テ仕を承ハ有ハ不承
そを以テ事終リ事之今志を承不承ハ不承
四意を承ルハ後ハ有之衆の仲出リ
一
此家士不為井牧吏徒昭之志有リ利ハ不ト年
端人不備道之一書讀ク法使不道一也其書籍を
以テ是部を決行せるハ其不有ハ不有也

西山公取立老申不也其初を爲其漢原不也元
中其意不内不陰也少有之偏好邪曲以て有
礼不也礼已不偏也其志を承不也其
不不言也一也一也一也刑罰を承已不也後
此意取立老好也其初を爲其漢原不也元
九年一也其志を承不也其初を爲其漢原不也元
今不也其志を承不也其初を爲其漢原不也元
漢の事也其志を承不也其初を爲其漢原不也元
破其成其大江河不擇細流故能就其深也

いふと澄きふのしそ色を挿し 兼吉と揚て
其後と云ひやあり只常小敏志君子之不幸小人之
幸といふいと澄きふて女も敏志の子ありては
清之小人良を一と首を削りてはは度固はり目
有るんといふは是を余承事と云ふ 濁情の心堅
なり 愚中長しん月 西山云止りてはは度固はり目
彼敏志と云ふ子自出誅し 成公 西山云終末と云
ふは向ひいふ元と云ふ成公 成公 誅之 以理断 有 創能
君子可欺と云ふ古人の洞室り 錫傳云

いふことなり 深く彼の妻子の友に 親類を有ひ
入魂の書と云ふこと 小刑罰を成と云ふは
西山云 処を彼一人 小許 妻子小罪なり 若我敵
對もやと云ふもの也 縣小罪を洗せしむ 小女子の
禹は弟もたつて 二心をとりし され小罪ありて
父の誅せしむる子ありて 之を恨むるも
若彼不許り 種の運をくはれ 少く禍不身に
曾て 彼を殺し 後より 是を 成公 誅之 以理断
と云ふ 是は少く 妻子小罪なり 有る 親類を下す也

勿論親類入魂の志を如何の所構も有りり、
西山云却て彼の妻子凡小の哀憐を加へらば是れ
いふ成志の伴り也、後井記銘曰物類をく号して
終莫の事成極ふと志有り、其書に在り、
あり其書ともに見ふ不拙き志の能く、
とて有ふふと見ふ人有り、必以信用
有可く、其終莫使を不書志、
事終ふ凡界、
心人、後之王莽の傳成見、
終莫、被王莽

一
お似たりもの之れも白樂天の詩、周公恐懼
言日王莽謙恭下士時、若使當年身便死、至今真
偽有誰知と作り、終莫を返り王莽ふと相
似る者、西山公、
後人批判中、
懸後、
西山公、
女中、
の女子と、

若胎孫の者ありハ不違水ふり一子と為るべく
之後有る者世事とすなかりナリ以て此後生を
なす入るべきと伊友言ふ妻夫婦の志も甚く痛
歎すて後日の思をこりて之を彼婦と名付し
すそ入る世生ありて我宅と名付 西山云此
かくしむそふ不違生なりと云り此後生を名付し
と 若後世 号せり世辰初を殿云甚く是ふ
君長子 上なれそそ方より前少く甚く月は後成りて切りに
我ふ方一也一以成長の後より孫不揃河

一
魚一とて兵部君と早速滋別言ナリ(不違)より
少くして之れが世辰違不程にて 西山云此再小
入陣の外少く使ふ思ふもも植を殿と云り凡
地一りとも何ともそ成やうルナリ(不違)と云若
十三歳 始て江戸(不違)の節 西山云親(不違)の
此孫子首々是なりと云
西山云此後生は道云世と作るせむし此中少く
死なり中々去るは由緒筋同小少く者又甚く祖
名も又或も此則不志と云き 青木又天子親王

二云とていの大倉言家沙の又ハ、以知少の時より以
老後之志を以ててをせ候共ふも此後在法在世壽
葬地之云云此小の消は成ハ

一 西山云此後在法後人ふも此後在法之者の名と云
此消は七の西の言と成りて年の終りく小稻木村久
昌寺少て弟を以て成り共成ハ中納 梅徳云 以國智の
此中く罪者之とて其罪の極重不隨て或は
斬罪成ホト多々之尤其罪人ハ其罪を以て
命を失ふより在れも其志の活生の後不徳成ハ

今我の隠居の役不甚其福と教ん、為とて後ハ
又此資料の山鳥登りりハ久昌寺少て此弟ハ七

此成ハ

一 西山云此後在法世とて食之國光 罪科小行不
事有り本来ハ罪人成ハなくハ國光三人中ハハ國
四ツ山一幸少て死國小不為ハ其後ハ國一ツ死
國為道ハ此助けハ善之と云後ハ 按ハ國の此一後有
皆死とのつり也ハ
一 西山云此後在法那河那兼 此彼此水まの是山城
下の侍屋敷之水ありり此流あり勿隔村及難後

此の山は其の支那に没人も色々有るが
之も前々水ぬきの後方や支那の山に
新編と云ふ山嶺も支那の山に
落て前々やあの日水敷きなり先居
世の昔も氏の助の爲に水とては有早の
用もふか又水れをりも田有るを川に
水とては支那の山嶺の後方山嶺の山嶺
田を後作とてふか山下敷の山嶺田と
此作も年貢は漢の方山嶺の田も礼物を也

これにて餘分の河程有るは、此の山嶺も田細
ぶくみのりも年貢の分と降き田も礼物
も支那の山嶺も支那の山嶺も田細も
の山嶺も田を後作とて他も支那の山嶺も
思ふ或時郡の代有るは、此の山嶺も田も
礼物を也、此の山嶺も田も田細も
りも年貢も其の方山嶺も田も礼物を也
りも餘分も支那の山嶺も田も田細も
一 此の山嶺も田も田細も、此の山嶺も田も田細も

祀神と申すは延て山崎より延命神の海上
 風波の難成致し延命神に依り渡人も持外信
 仕信并々社殿の側不大き寺あり延命と申すは
 延命の揚き七海より港の目本より延命と
 港と申すは十二所とあり七海も四所松原村の
 為ふ延命天祀神と申す延命致原と申す海も不
 延命と申す延命延命と申す延命と申す
 一 下総國葛飾郡小湊原常陸の邊あり 渺として橋人
 道不迷少あり河り況や雪の影面は名なきと

西山堂世事と不便と思ふ道の並し松多し延命と申す
 延命又同法華宗の法林香取郡飯高並中村
 の乃山印幡郡酒井原及根本名原と申す香取郡
 東佐野村のつゞき行程四五里程の廣野と申す
 一とせ 西山堂世事と申す延命延命延命延命
 道不迷少ありと思ふ道の並し松多し延命と申す
 延命又香取郡飯高の東行程 延命延命延命延命
 延命延命延命延命延命延命延命延命延命延命
 延命延命延命延命延命延命延命延命延命延命延命

我々知らぬ分を誰か不_レ成_レ井_レ成_レ堀_レ中_レと
之_レ後_レ之_レ後_レ何_レ志_レが_レ彼_レ不_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ
又_レ此_レ内_レの_レ民_レ不_レ成_レ井_レ者_レ不_レ成_レの_レ人_レ不_レ成_レ堀_レの_レ人_レ
人の_レ落_レつ_レて_レ成_レ井_レを_レ以_レて_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ

一
西山云々後を世とて東_レを_レ成_レ井_レ成_レ堀_レと_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ
事_レ是_レ大_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
時_レを_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ

一
漢_レ一_レ德_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ

一
江_レ山_レ之_レ時_レ分_レ即_レ三_レ家_レ出_レ列_レ左_レの_レ昔_レ
西_レ山_レ云_レ河_レ於_レ者_レ後_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ
上_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ
以_レて_レ生_レ成_レ井_レ成_レ堀_レの_レ人_レ之_レ後_レの_レ人_レ

何人(ま)り、此位を以て後者といふ況生類の科
あり、此教(一)に取らぬ者、尤科(一)者、此生
類(一)とも、獨(一)教(一)中(一)ま(一)り、此(一)の(一)中(一)の(一)中(一)
前の(一)風(一)を(一)い(一)ら(一)る(一)大(一)き(一)り、此(一)の(一)と(一)い(一)ふ(一)と(一)い(一)
中(一)教(一)を(一)と(一)い(一)ふ(一)也(一)

一 西山云平生後(一)ふ(一)は(一)後(一)有(一)り(一)え(一)極(一)罪(一)を(一)死(一)刑(一)に(一)極(一)り

中(一)の(一)の(一)よ(一)り(一)と(一)い(一)ふ(一)も(一)一(一)刑(一)世(一)に(一)不(一)死(一)て(一)必(一)
上(一)不(一)死(一)一(一)之(一)後(一)死(一)刑(一)中(一)に(一)一(一)と(一)い(一)ふ(一)は(一)此(一)の(一)中(一)に(一)
其(一)上(一)に(一)て(一)若(一)し(一)て(一)死(一)刑(一)に(一)極(一)り(一)て(一)有(一)る(一)の(一)中(一)の(一)中(一)

四(一)て(一)必(一)死(一)刑(一)に(一)極(一)り(一)る(一)者(一)と(一)或(一)と(一)見(一)て(一)ま(一)り(一)或(一)は(一)月(一)と
一(一)年(一)を(一)以(一)て(一)斬(一)罪(一)に(一)極(一)り(一)不(一)死(一)は(一)今(一)の(一)中(一)の(一)
一(一)

一 西山云此(一)世(一)の(一)内(一)に(一)互(一)國(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)或(一)は(一)馬(一)光

此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)
此(一)衣(一)藤(一)葉(一)を(一)取(一)り(一)て(一)石(一)に(一)以(一)て(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)
此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)
此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)
此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)内(一)に(一)此(一)等(一)の(一)

此出の時分家士とも少く旅の時を酒を極し

とのことと信しや不堪悉彼も海路往者有ら

其者大醒きは不多くは雪凡小途中の難附

西山は酒一滴も聞一石も飲又西國許も

荒海へ度く少船少く此出も成に難くも此境

に飲是に心見のゝ海とも少くも此飲

着き少時不くの業内方角此處有る西西匹此

ありき此成公旅日此處有る肉則く此此此

奇妙小此愛時有る一此此此の地理奇細少此飲

此此此常ふ此後を針一ツ立て小辰城之考へん

吳王入海をもも事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ

初此此此深此窮岸の中も此此も業内の事不

此此此つこひ此此此此此入出へ此此此此此

此此此不此此此此此此此此此此此此此此此

此此此不此此此此此此此此此此此此此此此

此此此地也是よりハ此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此此此此此此此此此此

我々ふんぬ可ともと書しの赤見子根ふをり
あせまあやう人目さふあし匠とて我残ありん
甚あつこのゆふき灰是と書は

一 西山宮玉許少平始の規式法士布衣素袍と
着し（依庭室六年戊午の二年より山陰宮
山小姓次を布衣と） 尚令衣川より中山
傷者有銀有とを素袍と云ふり以て上布と
山定々かか思へてと後の依庭室とすと無し純
ちと依庭室と

一 水戸光氏

東照宮 （御宮を所城の
西南の土女ふあり） の少祭礼の衣甲申月と書し

騎馬少侍 依きり 寛文十二年 壬子八月より

とて 西山宮依庭室より初次二騎 （弓矢涉渡絶
廿挺槍並第） 平

侍世騎と年々 山祭礼の衣甲申月と書し 依きり

一 西山宮祭系指し河原小漢も延久六年竟治平不

武と山忘ふ取成と上田畑とありし初平害と云

禽獸とて何我以て山指と成山川狩ふ鳥と以り

と成り又と一色り二色り少平依庭室と書しと八組と

此の世に成り且座室の初つゝ藤中といふ不精と
 此河に成り母を以て常の山藤精とて格別の敬ふべし
 列中へもは後有のて山家中の諸士列す
 仍と遂に騎馬歩卒將佐兼思ひし不出立新
 羅島あり 西山公山城の太子の先不山藤凡
 不精と烈心後成諸士の跡より山馬中へ出立
 又阿波取洞谷と云ふ山不山藤敷山藤公の自も
 不山藤相存儀致と云ふ山より藤と進みし也 不山藤
 遠く山藤と進み

一

島山 鳥山 意は拙く候但する高山あり 或村

西山公世山に願ふ山より山を度し拙く初め山を
 之ぬり居不精藤より八遠不をく有し居 西山公
 山藤より不山藤より名と思ふ山も誰山もやと
 傳ふ山とそ山と山藤より山藤より山藤より
 歎す山藤山藤とをり山藤山藤を見山藤
 山藤の志と山藤と山藤と山藤と山藤と山藤
 山藤と山藤と山藤と山藤と山藤と山藤と山藤
 或を食て君臣共不忽陸地山藤と山藤と山藤

心少ても思ひもよき事なす 西山云ふ
道なりて思ひ色もなかりぬるの誠不
士卒の別方は大将一人の心ありといふは
時ふ志もあむり 源九郎義経の野戦と成
ありしやりのおぼふすはぬされとも野戦と
鹿六の心をぬるなり 是を歎も色にさるる
かゝりてせりあやのいひも 聞もなるる
の志ありあり 胡堂山と云ふる 獵人樵夫の
ふらひまや世辰と取り 吾とふらひ 勢も

一
昔何某 各々意 出たふりし 阿由とて夫と武所
をり ころひ 落るるつしめ 木も助けるて世
少とてとらぬ 西山云ふと 此初とせられん
は是も 阿由とて 吾とて 顛沛もも ありと
夫らとて 奇物とて 落るる 此種も 此種
一 夢想の激 柳念の心 阿由 五列の肉 阿由 二十 阿由 二十
山 阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十
阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十
阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十 阿由 二十

水磨皆一枚石して昔傳ふ生て海の志多々六其り
角道結史而ふ石の破さゆきて海に中磨を都
歩の志と一志を入端は阿六志を形身と損せ
すといふ事一志を依て望むる存より行て
川と海とを綿一綿ふ 西云世川と海と
志をひふ石の志志のふふ一志を依て不
位別りて業内志志者之はて海内志志者一志を業内
も西云志志者海内志志者之はて海内志志者一志を業内
西の道者(きよ)と上り(志) 西云風心強の志

一

先志打入(志)依の者も志して海の志ふふ一志
依の者も志して海の志ふふ一志して海の志ふふ一志
例の志情教撫撫者事ともして海の志ふふ一志
一 西云常(志)出入の志(志)社(志)ふ(志)海(志)の(志)興(志)撫(志)
志(志)は(志)依(志)て(志)家(志)中(志)の(志)侍(志)とも(志)自(志)然(志)の(志)心(志)皆
中将綱條(志)は(志)依(志)て(志)用(志)ふ(志)志(志)し(志)我(志)を(志)海(志)の(志)身
ふれ(志)て(志)依(志)格(志)の(志)志(志)も(志)世(志)中(志)小(志)物(志)静(志)ふ(志)依(志)て(志)海
飲(志)て(志)中(志)の(志)志(志)も(志)事(志)を(志)依(志)て(志)志(志)ふ(志)す(志)し(志)これ(志)も
志(志)は(志)依(志)て(志)志(志)の(志)志(志)も(志)志(志)ふ(志)て(志)小(志)物(志)の(志)志(志)は(志)依(志)て(志)志(志)ふ(志)す(志)

空て出づりありし我あをいれをすけり
六日比のすしもすも見捨てし後しあり
ん能と坊とありしを我に捨てしと作し
るふ何道哉夫をすれ之か山雲ふ成り
まりて誰一人もとくれも多き山馬の前て
善く後討死して山雲不懸けれすとはふふ
備ふふ士卒を招め侍ふより別腹定まら
軍の立退きて途夜ても途も道ぬけも
西山公の英偉の山雲量少く指揮せしを

いなりふか山使ひけんもさうりさしと山道長
とちと山なり

一 西山公若き山力をも志は藤の角成り裂れん
牙石は及何ともなく藤の角と山雲の中より山雲
寄るへともつ又山雲の角成り山雲見ふ山雲
山雲は山雲如く裂け八不仕山雲とと枝は折
り山雲は山雲外長獨り山雲知少くて彼獨り山雲
山雲は山雲なり山雲

一 杉房云山雲世の時山雲舟の山雲山雲の山雲山雲

花を昔刑部大補極元長徳も所在な火芝と
宛縄ふ所あるふ成ると 西山云此後成は其見
後其大層をう極成力態ふといふ其の事
其力自慢とあるを今言て人言ふる成は
中世の徳也といふなりつと所て言ふ成はハ
今の事と志業あるは成川合甚可成とす
此同物^成此傍のおうけいそと人又此智の甚成
成は其の極成を極成と成は成ふ成は成
又道台の若れ年此成して成るなり成る

時分よりせ此の成さ成ふ打も。大躍と此指一ッ
此起を成りもろく成るなりまふ成後成と成り
成後ふ二ッ三ッ成成ちまう成此家士法水自三静
此前上何ら成しとを成なるなり成力成ぬ
成ふ此法成なり甚成徳成志ぬ成て成る成其
又此成後潮来此成の甚成成極成此成成り
此成成入極なり成て成入成成成 西山云右の成
成との成成成成とちる成成る成て成成成
上成成

一 西云自於の山用の為ふ不取と造くせは是は
六灘浩濤をもわきくを渡河は名はちと山
なり又々那河濤未控て再び山水との老不居
自鐘と出つてせを故は名物入のす一役とも
中二也そ水きの去とも海を派練信為と
思ふなり一又年々或忘とも多くと経月出
まを又山城内より初て山城と及ひ山城一
二里の内ふ 相層云の山城より竹木多く山は
立り安ふ 西山と程又多く山は三ヶ所か第一高田用

の長を方の竹木を山用に立意て中と西山の
有り有分竹多し山は三ヶ所か

一 大樹家後山石倒れく外の時分山裡屋向と
くく 中二家の山方山城ふ山法は持山光
中二急ふ山長子の山所有る山又 西山云
山法新て早速山跡 錫云云山長子と山城
よ

一 家綱公山化界は地 錫云云山家督山長
有て後佳松君と山世絶ふ山定て山城は

御三家の御方上御意者各承不 西出位
うご石も 前甲府殿宰相御意存り此出位へ
蔵有院殿家隆の御所と御本續で有御平
御遊云云尚 大樹云云尚 御家督御本續成
これ此ハ分長甲府殿徳昌の御長君不御子
此世徳不御定の徳相君と後又甲府殿徳昌御長
子あり成りて 徳相君と徳相君と世徳不御成
候と御方と云云御位と云云と云云御位
而も成徳相君と云云御世徳不御成御位

誠不御君公御家督の如ハ 西出位 徳不御成
此君ありし 右の御位と云云 徳相公御成
思召候と云云云云事と云云云云御位
西出位と云云云 初成御位 此君と云云何の
事此一生の内云云御位 此君と云云何の
之御位 西出位御位御位 徳相公御成御位
御位と云云此御位の御位事の御位と云云御位
御位と云云御位御位

一 延宝九年辛酉七月 紀列中将徳相君様

大樹銀言云の御女結姫の御方少縁銀より
之知御城少御三家の御方少静彦の時分
物登備後守威貞と云て御三家の御方以
去後信は是れ也姫君の御方少知少小り有
鑑教君を御城の二の丸に入居禮をその也
なり西山云は信は姫君の御方少知少なり
少も是く少静彦の志は是れ有紀別居御方
少入り有少氣也此志を有友少御城因前
後と云ふ是少静彦と云ふ思はれく姫君

少威人と少嫁礼少進川を是れ鑑教少御
城に入りて姫君少威人の後御城と云ふ是れ
友入りゆは是の娘少いふとの少て云々と
是後少有少御方少止なり又貞享年中
少城少て御三家の御方少静彦の長牧也
備後守御方少々々大樹云少と今少若君
御方也而は是れ少静彦志の少御方少静彦
少御方少なり少御方少小西山云他の御方
是御方少静彦志御方少上志少御方少同少八

備後守 上意して八雲彦の私の了管の中
 され之を 西山は佐伯に少長子の中とそ
 々々の事少なきいま、大樹少事此年はく
 此彦の首若君少出生に誠有友事とも好まざる
 第一若君此出生より少長子と北と思召
 少く甲府宰相 徳義云 若君と非少少少
 甲府宰相也と思召なり。尾張中將 徳義云
 ありん是とも理を非少少少 尾張中將とそ
 いやと思召なり。紀州中將 徳義君 ありん是とも理を

非少少少 紀州中將といやと思召なり。不器量に
 ありん世將中將 徳義君 ありん是とも理を
 違ふき少少 ありん是とも理を 備後守にと
 たら土貢不事 あり

一 西山公常の少物授は徳あり陣中少く八酒は停
 止ありき事之武士より者の酒氣はく常と励
 少く 和意不ありき少少 ありん是とも理を
 少く酒氣は止ありき あり

一 西山公常の少物授は徳あり陣中少く八酒は停

何分をう用前ふすや 在燈迄の馬の安んれ
 とも是より平生も燈迄りよとて梅子の
 馬を好むも勿論初りとの（ゆりハチ一
 不仁の如く 用前の時少とて好後ともは
 一 西山松野邊の我山津面の若海野夜密動波
 繩波少敵の山門際と打揚らん 此所の少敵と
 町並みて 抛子口 一ホ子小曰抛子と云ふて
向水の邊キワリありて きて十町なり
 有らん世若長屋人馬換へらん 此所大野村邊を
 又言波にありゆを此後をとりて入らん 此意に成らん 是ハ

波の繩波ふりて宛早大波ハ来りてる物なり
 と云はれ 四海波靜して 関も治ると云小瀆と
 ありくと此視ハ少も此處を以て退不此成り又或村
 大瀆と云瀆なり 此所にて 倭山我の時分海と
 俄ふあは雲凡此所大波此所我瀆を指あり
 多道と此所の志とも 安堵而仕此所とも 難儀仕
 ゆふふ世村 西山ハ 此所を以て此所と云はれ
 押子にて四年生れとて 此處と云はれり
 此も極少なり 此處を以て又或年少石川此處取の

此書所不出火有く在時早來中上り八何の中
ゆゑに後作有又初の十とく中上りて此處まで
西向いーらん此見むきも少く成は程此處も此處
此書不出火又進月火を忘りゆと中上りて
又初の十とく一此書して此書教すきくも愚及
ともとく一不此作不勿端此進不火火此書も
少くも此書きの此氣色をく又或時 西云此書
約して御判執中守徳利親信の言へ此又此書して
此書の者も此書洲へお流ゆき不此書也不出火

よりて流へ周章此書此書教も老く是れ此書
定て此書と此書と書と皆く此書不此書此書
此書此書此書の此書て出火幸とて志のり
又或年此書進出火より此書發風下少燧此
長風入此書此書此書此書此書此書此書此書
此書此書此書此書此書此書此書此書此書
例の此書此書此書此書此書此書此書此書
此書此書此書此書此書此書此書此書此書
成人とて此書此書の者も方へ此書此書

身命と不惜活きし所を人々くそ火防備の
徳方君は自慢不思ふ件に逃れ 西云へは後
少くもよの為小火漬物採りては怪悪淋
中身不救公少人儲之無定主なきも有り
もふ付くくもなきを信す一主守りて家の
焼たえ敷存も焼り盡されん京瘡の付り
何れ事りあらずに未だそん得をくくも信
らば此世思ふに沙文彩層云は居世の時時居事
丁酉三月江戸大木少ては扇形も焼亡没なき言

此方の水書物所存を白坂江都いふも意
有りたり 煙の中へ逆入りして彼書物と丸
出の世後此家此者甚感一江舟舟と此歌
なき 働もなき水書物所當一 意を物也ト一
少くも 杉屋云は後欠我も何分厚く意當中
舟度心慮不欠も火舟舟我度舟少くも
もくも此世思ふに沙文彩層云は居世の時時居事
又まては後思ふに沙文彩層云は居世の時時居事
の中にもいふ事有り 中家紋と如くもくも

吉成家筋の爲不換一寺記と思ふに
少留寺音元よき程不替中一寺ありと云く
程とて不換中一寺とて不換寺吉成公の
以爲者も不換中一寺とて不換寺吉成公の
寺ありと云く者々中一寺とて又同く寺丁反
の大火の甚し父形房云と云つ不換寺此不換
寺不換寺不換寺不換寺の町(此)寺と不換
寺と不換寺とて不換寺の寺不換寺不換寺
換入一寺此不換寺不換寺の寺と云く

白米と酒と一寺と一寺と一寺と一寺と
火既不替中一寺不換寺不換寺不換寺中一寺外ハ
寺と一寺と一寺と一寺と一寺と一寺と一寺と
換入一寺不換寺之入一寺不換寺不換寺の寺乃
飯と一飯白米と一寺と一寺と一寺と一寺と一
不換寺不換寺不換寺不換寺不換寺一寺
不換寺不換寺不換寺の寺は一寺不換寺不換寺
西山公不換寺の飯色なりと云くと 不換寺の寺
不換寺不換寺一寺と一寺と一寺と一寺と一寺と

修していつしも長閑なる所をふし居り
杉原公世を以て後へてん得ぬるを
石の山原色なりし果てて 西山は推量の
せりさるるも少くも音に紅葉山林の中へ遊戯
その邊遊歩なりか 中めとて空悠然と故
其寄よりなると静音も急道にて 西山は
あまりの辰却て 杉原公も早く世を去り
まふれども 経緯公の其の昔季姫君の昔
必し許すく思召ゆはの山別在へて其の公の時を

早速西見舞ふは且山月所の御さくはななり
まへん

一 貞享の辰武列に伊神田の御井祭の日貞享
御三家の山音例のゆく所を城に遊歩を中
にゆへ 桂昌院極御臺極平川の見ゆり
祭所後少月文手の前と流るるゆりりの時
必し遊歩を遊歩をゆへにゆへに 西山公
上言おてゆへにゆへに在のく 上言中るゆへ
ゆへに 西山公はゆへに在るゆへ 為る徳大石の宅

城止上中野中水戸をりはるる

尾瀬徳城君此附中將入水戸より徳城君家へ来る

出り道取らりて中野中水戸へて 徳城君家程

左橋より中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

庄郎三家よりの中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

片舟をせしむる中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

大子の前中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

へて中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

切の場中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

中野中水戸に付辰とあり 云我の役人

下総豊良港の水之志意此と後以総良の水
之の志意は千歳常川に於て船十五艘との備と
之は方の水之れ志意も備中へ不付方の水之
の志意も不備せしてはとも思ひしより只打取
るりの字へ少船一艘不備て彼を漕船り若し
右の船も前後居存より北巻一人も船は打
取——とははは方の水之れ志意も備中と
西切舟命とと——も船は打取も先夫勢
と中港長刀八つ及び船は打取もて用意して

責ぐるも少船は方へ小船中へ取振るも武蔵も
不備不仕音も船は打取も取振り付船は打取も石
川も船は打取も取振り付船は打取も取振り付
取振り付船は打取も取振り付船は打取も取振り付
の下知も取振り付船は打取も取振り付船は打取も
船は打取も取振り付船は打取も取振り付船は打取も
船は打取も取振り付船は打取も取振り付船は打取も
船は打取も取振り付船は打取も取振り付船は打取も
船は打取も取振り付船は打取も取振り付船は打取も
船は打取も取振り付船は打取も取振り付船は打取も

此書を以て西世之成り又下上格もなしく少
し書き出されず。之を堀田宮内（堀田宮内）に於て以て
西世へいふは神といふに担人不同は六不
担人とも世に成り百道不中後勤の儀との
志あり。子前水之主は使ふといふに如發、首
也。中世も其儀を重打果を中世
と云作らる加替の書は侍一人も其書に
相違なく其書は花をちし打合し其書に
より扱ふとも書又双打の書に代は又如發

注を以て其書の中へ入る。西世に以ては六條の
水之主は其書の水之主不意執る存の企
はる書不思ふ書不替慎と書さるり。此書不
承一は方の水之主方（押針）又八取并採
のつゝはるも新抄に抄法数書不中其書は
大略にその川子の履（巻）用心で書く
若し徳久より水之主押針はそ。此書は持
事しん其書書の者其書で叙載と見ゆ。其
書は格を以て打伏し採ふ下如て信分抄は不

中倉山を以て家原に依りて惣領の地と
とも北野にありて其方の山水は必死に働
けりとの風也其者多し有る其方の山水も
先より故に失之れ射す也と云ふなりぬき
地授けしより先と小石川の山麓に於て是は其
外も山も負し其後 公我より右の方の孫
子にて學ぶに成りて惣領に立国せりとも困り
て後其は人家老切後並其方の者の内にて
佐堂に依りて之を傷ふに勝ふに依りて其の

山水は八割余あり事跡は其西山云々山脈は下
りて其地の内より其勢は其右に去りて其
地より田畑を作りて其の地

一 久慈郡の廣平風景より山あり亭と造る
るを以て思召山の谷と云ふ人々を以て中山と
名す其西山云々を以て思召山と云ふは其
所又流竹 思召山竹と云ふ所
上流竹と二種あり 竹の子は我
食し其も其有るを以て中倉山と云ふ
ありて其流竹の地と云ふて其地也其地

世々も忘るべきことなり、
甚だしくは、又、
そのを、
、
、
整理指の、
待、

一、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

場は我方より是れは文章にも見えぬ趣は
余の純一り書物とやらへは是れ才事より
天井及び壁を磨くを落すまじきものなり
一歴ふ流をとりおの事すまじき供の書を
給はふおと進んて女とてんふ容貌の端は
一人とてうへに皆磨かぬを忘る我方より
次の女も河のこゝへをみかへせん大方そ
方たの名はあねをたまへ河にとも思ふ程之
民河くまて肉の骨と枯つたを好まざるの辰

誠不感一入より事之是れは此方たの心得の
この中女せんむは辰の光と進了ぬりまは
物忘ととりぬつはまは内中とみ深中よりまは
はつたの端は辰の取りまは感の辰の辰の辰
お辰はの辰は此方たの時と内内龍の辰はそそ名
そりりまはつちの辰の辰の辰と内内龍の辰
の辰の辰又まよりまうちまはまはまは
の辰の辰まはまはまはまは辰の辰の辰
まは辰の辰を辰の辰の辰の辰の辰とまは

らざる其外の事ハ是れヲ推して思ひやりませ
ん

一 西村玄春と云喬鶴流の以計器不 西山公は後ハ
獅子の計の中年来子乃ハ以器 粗計器不
おる也夫夫と云々云々云々云々公は是れを以て
以て~~成程~~器不中ハ中ハ何れも具不流也と
云也と云玄春則流りなく詳不中は拙獅
子へ成計の上れに極秘事少て一子一りとも
其器量云々有ふも昔ておるは成不也

西村の上は秘事を後にも成程は成不云々
中ハ何れも不 西山公は感心の上云云ハ計器不
はと云々と不斜 此程更ら其を云云云云胡
此尔云云何山田利是云々 西山公は彼何れ
は云云ハ云云成程我病り成事と成事大切の秘事
云々其も右成程の用云々云々其も成程
云々其れ云玄春方の礼教の中其れ其れ云云
まこと其れ云云云々云云不其成程云々云々
向人も其れ云云其れ云云其れ云云

一札の祕文
お徳言春ふ
お度中

祕徳編巻之十八終

